OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近代の絣と京都の機械捺染 ： デザインと技術をめぐって
Author(s)	上田, 文
Citation	デザイン理論. 2019, 73, p. 76-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71193
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

近代の絣と京都の機械捺染
── デザインと技術をめぐって ──

上田　文　京都工芸繊維大学 美術工芸資料館

はじめに

機械捺染（ローラー捺染）が日本で初めて導入されたのは明治31年（1898）の京都で，化学染料によるモスリンの「写し染」を開発した堀川新三郎によってであった。機械捺染とは，銅の円筒ロールに文様を彫刻し，そのロールを機械で回転させて布に図柄をプリントし大量生産する技術である。

これまで大量生産，廉価品という評価から，機械捺染は美術やデザイン分野では研究対象としてほとんど取り上げられてこなかったが，2001年に捺染図案家であった寺田哲朗（1908–2000）所蔵の図案原画や生地見本が京都工芸繊維大学美術工芸資料館に寄贈され（寺田資料），調査研究が始まった。とくに絣デザインの面白さ，手描き図案の精密さ，見本裂の綿プリントの精巧さが注意をひいた。

本発表では①なぜ絣柄が大量にプリントされたのか②捺染絣の図案家がどのように誕生したのか③絣図案はどのように銅ロールに彫刻されたのか，に注目して以下，１，２，３の章で考察した。

１，絣の時代

明治時代になるとそれまで日常着や労働着であった絣が大流行となる[1]。久留米や伊予など木綿の藍染めによる紺絣は工場制手工業が整備され，伊勢崎や足利など北関東の絹織物産地では，紡績絹糸による絣織「銘仙」が生産されるなど，それぞれ明治20年（1887）頃に発展した。こうした流行は「型染」による「絣柄」を生み出し，やがて機械捺染にとって代わられることになる。

絣をさらに進展させる要因になったのが明治36年（1903）の第五回内国勧業博覧会であった。列品区分の整備が進み，第六部「染織工業」が設定された。博覧会終了後，日本全国から出品された絣柄を掲載した『絣の泉』（同仁社）が出版されたことは注目される。同書のなかで絣は「実用」「価格低廉」「堅牢」として推奨され「意匠図案ヲ改良シテ美ヲ保ツベシ」として，機械化の推進や競進会による図案の改良が急務とされた。これまで絣の布地を示す「絣」という語が，明治30年代後半には懸賞募集や図案集によって発展し，繊維産業にとって重要な「デザイン」として扱われるようになった。そうした結果，明治40年（1907）頃に浜松で機械捺染による「抜染絣」に成功し，京都でも同年に抜染絣の生産が始まった。以後，大正期にかけて着物用の絣柄の綿プリントが盛んになった。

また明治41年頃に秩父や伊勢崎など銘仙産地で「解し織り」が発明された。糸の段階で文様をプリントするため，自由な柄が織り出せるようになった。伊勢崎や足利で華やかな銘仙が盛んとなり，捺染絣も図案家によってより自由な図案が展開することになる。

２，捺染図案家の誕生

絣デザインの需要と機械化によって捺染図案家が誕生してくる。その第一人者が布施喆詮（1887–1940）であった。喆詮は明治35年（1902）に京都市立美術工芸学校に入学し，古谷紅麟にアール・ヌーヴォーなどヨーロッパのモダンデザインを学んだ。卒業後は大阪のモスリン問屋に就職し，モスリン友禅図案

を手掛けた[2]。当時，伊勢崎，足利など関東の銘仙産地で図案を応用した意匠の進展が図られるようになり，時を同じくして喜詮も頼まれて捺染絣の図案を描くことになった。それまでの捺染絣は，売れ行きのよい絣を模写して染め出していたが，喜詮は，図案教育を受けた知識をいかして，明治42年（1909）に応用を加えた新しい捺染絣の図案を生み出した。これを捺染図案専門の図案家の誕生としたい。図案の段階から絣足を描き込み，プリントでも織り柄のように見える「絣図案」を様々に展開した。大正期には捺染絣の黄金時代となるが，捺染図案家は大量生産による低価格の実現という工業的分野の一端を担い，やがて無名の存在となっていく。

喜詮に入門し昭和４年（1929）に独立した寺田哲朗は，手描きの絣図案を学び，時代に合わせた新しい図案を追求した。『昭和７年参考見本帖』（寺田資料）と書かれた見本帖に寺田の図案生地が多く貼り込まれているが，絣の柄が大きくなり，色彩も明るくなっている。興味深いのは，「絞り」や「白いドット」を併用した自由な絣図案が展開していることである。捺染絣が独自のデザインとして進歩し，さらに発展したことは注目される。

３，ロール彫刻と捺染絣

機械捺染が導入された当初，最も課題であったのが銅ロールの彫刻であった。はじめは新しい柄をプリントするためにヨーロッパに図案を送って注文したので，出来上がるまでおよそ半年を要した。捺染会社では外国人技師を雇って彫刻術を学んだが，日本で最初にロール彫刻所を開業したのは，堀川新三郎の捺染工場で働いた武田周次郎であった[3]。武田はイギリスやフランスなど各国の長所を取り入れて輸入彫刻機を改善したのち，独自のロール彫刻術を案出し，明治36年（1903）に京都で武田彫刻所を開業した。

続いて明治38年に武田彫刻所に徒弟として入門した徳岡善九郎が大正６年（1917）に独立，京都に徳岡彫刻所を設立した。創業当初は機械捺染の全盛期で小巾（着物の反物）茶絣の彫刻が中心であった。糸目を彫った紙をロールに巻き付けて揮発油でニスを洗い，その後エッチングで腐食させて彫刻していた。大正時代後半は機械彫りのミルで糸目を入れ，そこに絣柄をトレースして手彫りしたという。

昭和初年にかけて大胆で華やかな銘仙にあわせた柄が多くなり，昭和２年（1927）に実用新案を取得したポンチングマシンで彫刻するようになった。上下に往復するピンタガネの打点を少しずつずらしながら，絣文様をロールに彫刻する日本独自の機械であった。

調査のなかで，徳岡工業株式会社（前身は徳岡彫刻所）のご協力により現在では全く使用されなくなったポンチングマシンの実際の作業を撮影することができた。これは産業技術史の記録としても重要なものになるだろう。

おわりに

絣文様の着物と機械捺染は，大正から昭和初期にかけて最盛期を迎えた。大量の図案が必要とされ，捺染専門の図案家が誕生する。絣図案は，ポンチングマシンで彫刻され，見事に機械捺染された。機械捺染研究においては図案と技術が密接に関連しており，その両面からのアプローチは欠かせない。今後もデザインと技術の両面から研究を進めていきたい。

参考文献

1　浦野理一『絣　日本染織総華』文化出版局，1973年
2　毛斯綸協会『染織図案変遷史』1936年
3　青木美保子・上田文「京都近代捺染産業の軌跡 ローラー彫刻の祖 武田周次郎とその後」展図録，京都工芸繊維大学美術工芸資料館，2015年